

「山中商会」とはいかなる存在だったのか

山下裕二

かつて小林秀雄は「骨董」と題したエッセイの中で、「山中商会的動き」という言い方をしている。どういうことか。「骨董はいじるものである、美術は鑑賞するものである」として、「鑑賞」＝「美術」よりも「いじるもの」＝「骨董」にシンパシーを寄せる小林は、いわゆる「鑑賞陶器」を欧米のコレクターや美術館に売りまくった山中商会のありように対して、皮肉めいたスタンスをとっているのである。

この随筆は新潮文庫の超ロングセラー『モーツァルト・無常という事』に収められているから、それで読んだ方が多いだろう。昭和二〇年代、骨董にのめり込んでいた小林は、「山中商会的動きが、骨董屋さんの間にも、陶器に対するこの新しい西洋風の態度をもたらした」として、かなり苦々しく見ていたことがうかがわれる。彼は日本橋の壺中居（いまも健在である）をはじめとする昵懇の骨董屋から、山中商会に関する芳しくない風評を聞かされていたのだろう。

では、ここで小林が自明のこととしてさらりと言及する「山中商会」とはいかなる存在だったのか。それを知らうにも、これまで確かな書物はなかった。本書は、明治から昭和初期にかけて、アメリカで東洋古美術の浸透に決定的な役割を担った山中商会に関する、決定版といえる優れたルポルタージュである。

「東洋の至宝を欧米に売った美術商」というサブタイトルを見れば、否定的なニュアンスが込められているのかと心配する。だが、そうではない。著者はアメリカの美術館などに保存されている領収書や手紙などの一次資料を徹底的に探索し、山中商会が果たした歴史的役割を丹念に取材して、きわめて貴重なノンフィクションとして上梓した。私自身、ジョー・プライス氏をはじめとする

欧米人コレクターからの仄聞を通じて、山中商会の存在を漠然と認識してはいたが、本書から教えられることはきわめて多かった。脱帽である。

同族会社である山中商会がニューヨークに最初の店を出したのは、明治二七年（一八九四）。日清戦争が勃発した年である。本書の主人公、山中定次郎（一八六六～一九三六）はこの年二八歳で渡米し、瞬く間にビジネスを拡大し、ボストン、シカゴ、さらに富豪たちが別荘を構えるアトランティックシティ、ニューポートなどへと出店していく。コレクターであり、ニューヨーク五番街に店を構えた山中商会の大家でもあったロックフェラー二世をはじめとして、フェノロサ、ビゲロー、フリーア、ハヴマイヤーといった重要人物との交友が丹念に跡づけられ、三〇〇ページを越す大部を、ドキドキしながら一気に読み終えた。

終盤、ヤマナカ & カンパニーとしてその名を轟かせたこの会社も、第二次大戦の荒波に呑み込まれて接收、清算を余儀なくされ、歴史の闇に消えて行くこととなる顛末を詳細に描き出した著者の力量は、驚くべきものだ。アメリカ国立公文書館をはじめとする資料を丹念に読み込み、つてを頼って関係者に取材することができたのは、長年ニューヨークに在住する著者ならではの仕事。

著者・朽木ゆり子氏は、数年前に上梓された『フェルメール全点踏破の旅』で名を馳せたが、この渾身のルポルタージュを嚆矢として、東洋美術をめぐる日米関係にもさらに深入りされていくことだろう。私はいまだ面識がないが、お会いすれば共通の話題がたくさんあるに違いない。

そういえば、数日前、ニューヨーク在住のオークション会社勤務の友人と久しぶりに会う機会があった。彼もまた山中定次郎と同様、欧米のコレクターや美術館に「東洋の至宝」を売りまくっている男だが、はたして山中商会のことをどれほど認識しているだろうか。ロックフェラーが大家だった山中商会の豪奢な店舗は、五番街の五三丁目と五四丁目の間にあったという。彼が勤務する某社は、そこから目と鼻の先にある。私はここ十数年、ニューヨークに行くたびに某社を必ず訪ねているが、今度訪ねる際には、山中商会があった場所を探してみたいと思っている。

（やました・ゆうじ 明治学院大学教授・日本美術史研究）